

論文審査の要旨

博士の専攻分野の名称	博 士 (教育学)	氏名	境 愛一郎
学位授与の要件	学位規則第4条第①・2項該当		
論 文 題 目			
保育環境における「境の場所」としてのテラスの機能と特質			
論文審査担当者			
主 査	教 授	七木田 敦	
審査委員	教 授	河野 和清	
審査委員	教 授	山田 浩之	
審査委員	准教授	中坪 史典	
〔論文審査の要旨〕			
<p>本研究は、保育環境における「境の場所」としてのテラスに着目し、対象園において子どもがテラスを用いたエピソードの質的分析を通して、その機能と特質を明らかにしたものである。</p> <p>第1章では、「境の場所」に関連する異分野の論考として都市研究や建築研究に視野を広げ、場所と場所の間に関する論考を検討するとともに、保育環境における「境の場所」と関連づけることで分析の視点や比較対象を得た。具体的には、「中間領域」にコミュニティ全体の共生システムを見出した黒川（1996）の論を参考に、「境の場所」を園環境全体の中に位置づけるという視座を得た。</p> <p>第2章では、先行研究の課題として、対象とするテラスの検討が予め限定された機能の範囲に留まっていること、子どもがテラスを利用する際の経緯や文脈の分析が不十分であることなどを明らかにするとともに、A園のテラスの機能と特質について検討した。観察から収集したエピソードの分析を通して、6つの機能（【園生活の玄関口】【屋内と連続した場所】【屋外と連続した場所】【独立した活動場所】【やすらぎの場所】【猶予の場所】）と2つの特質（≪園生活のジャンクション≫ ≪あいまいな場所≫）を明らかにした。</p> <p>第3章では、前章で得られた成果に基づき、より多様な保育施設のテラスに応用可能な知見を得るために、研究方針やサンプリングの方法について論じた。その上で、A園を軸としてテラスの奥行きが大きく利用の自由度の高い園と特徴づけるとともに、テラスの奥行きが大きく利用に制限のあるB園、テラスの奥行きが小さく利用に制限のあるC園、テラスの奥行きが小さく利用の自由度が高いD園と、それぞれ対となる特徴をもつ3園を新たな対象とした。</p> <p>第4章では、全4施設の観察で得られたエピソードを分析し、第2章で明らかにしたテラスの機能と特質を再構成することを通して、4施設間でみられる共通性と独自性を検討した。その結果、≪生活・活動のジャンクション≫ ≪つかず離れずの関係性≫ ≪柔軟な生活・活動場所≫ ≪生活・活動の周縁≫という特質と、それらに関連する 8</p>			

つの機能が共通して存在することを明らかにした。また、それぞれの用途に関しては園ごとの独自性が見られ、これらは、テラスの奥行きや利用の自由度よりも、周囲の場所、環境全体の大きさや条件などと関連することが分かった。

第5章では、前章までの成果により多角的な考察を加えるために、不可視的・非物質的な保育環境との関連性におけるテラスの機能と特質について検討した。前章までで得られたテラスの機能や特質は、園ごとの時間の流れや規範・規則などと無関係ではないことから時間的環境に着目した。収集したエピソードの中から、時間的環境との関わりが表出しやすいとされる「待つ」行為を含むものを抽出し、行為の対象と方法について分析したところ、各園のテラスでは、7種の「待つ」行為が展開されており、子どもが自身の時間の流れと他者や集団の時間の流れの差異を経験し、その調整を行う場所となっていることが分かった。

第6章では、D園の保育者を対象としたグループ・インタビューを通して、テラスで過ごすことが、その施設の人間関係や規範・規則の中でどのような意味を持つのかを検討した。その結果、D園の保育者は「テラスだから」という理由で介入を控えることはないが、子どもの自由な活動を尊重する園の方針と、保育室や園庭のどこにいても、目の端で互いの状況が把握できるテラスの物理的特質が合わさることで、テラスが集団の規範や習慣からの逸脱が許容される避難場所として機能していることを明らかにした。

本研究の学術的意義として、次の点を挙げるができる。第一に、従来の研究がテラスを「遊び場」として捉え、そのための環境構成のあり方を提唱するあまり、テラスにおける活動と他の場所における同様の活動の差異については明らかにされてこなかった。それに対して本研究では、各種のテラスが有する機能を場所の特質と合わせて検討したことで、「遊び場」などに留まらないテラスの意義を明示したこと。

第二に、本研究では、テラスが保育室と園庭の間の「境の場所」であることに留意して検討することで、テラスが周囲の「主要」な場所では展開しづらい活動や、得がたい過ごし方を受け入れる場所となるなど、子どもの生活を充足させる構造を明示したこと。

第三に、奥行きの大小や周囲との隣接状況が異なるテラスが、それぞれの保育方針をもった施設のなかでどのように機能しているかを明らかにすることで、今後の研究および実践に応用可能な基礎的枠組みを提示したこと。

以上、審査の結果、本論文の著者は博士（教育学）の学位を授与される十分な資格があるものと認められる。

平成28年2月12日